

〈特集〉「東南アジア海域世界の森と海」(II)*

スマトラ泥炭湿地林の近代—試論—

阿 部 健 一**

Peat Swamp Forest in Sumatra: A Perspective

Ken-ichi ABE**

Peat Swamp Forest is a unique ecological unit found almost exclusively in Insular Southeast Asia. Ecologically, the peat swamp area has been the least favorable environment for human habitation. Economically, the area and its forest has had no goods or valuables to attract people from outside. Thus it has remained uninhabited.

The situation has changed since the mid-nineteenth century. Beginning with Singapore's expansion and its demand for forest resources, the progress of "modernization" has led people to seek unrealized, hence untouched, resources in the area.

Today, the area is being widely, rapidly and unrestrictedly reclaimed for new resources, mostly as farmland for commercial coconut cultivation. The policies or norms of development in this area, which has hitherto had no long-lasting relation with human activity, lie open to criticism.

I は じ め に

東南アジア島嶼部には、他の熱帯地域では見られない特異な森林が広く存在する。泥炭湿地林である。泥炭湿地林は、より正確には、アマゾン河流域、カリブ海島嶼部の一部、南アフリカ北岸に点在し、アフリカ熱帯にも稀にしかも局限して存在することが知られている。しかし、東南アジア島嶼部ほど広域にまとまって存在することはない [Whitmore 1975]。広大な湿地帯に成立する泥炭湿地林は、島嶼部東南アジアの森林景観を特徴づけるものといえる。

本小論¹⁾で扱うのは、この泥炭湿地林と人との関わりの歴史である。対象とした調査地域は、スマトラ東海岸のリアウ州、インドラギリ河口とカンパール河口に挟まれた一帯である

* 以下二つの論稿は、30巻4号で組まれた〈特集〉「東南アジア海域世界の森と海」の続編である。

** 京都大学東南アジア研究センター；The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

1) 本小論に関連する現地調査は、断続的に1990年6～8月と12月、1991年12月、1992年8月、1993年1月に行った。トヨタ財団研究助成（スビアンディ・サビハム代表「スマトラ沿岸低湿地の生態系と土地利用の変化——地域の生態系と住民社会の現状に根ざした新しい地域発展の在り方を目指して——」）と一部、文部省科学研究費補助金・国際学術研究（加藤剛代表「島嶼部東南アジアのフロンティア世界に関する動態的研究」）による。

(図1)。泥炭湿地林は、カリマンタン南部、サラワク・ブルネイ、マレー半島、そしてスマトラ東海岸に分布するが、今回調査対象としたのは、なかでも最も深く厚く森林の広がる地域である。

目的とするのは、東南アジア島嶼部に特異的に存在するこの泥炭湿地林の、東南アジア海域世界における意味づけを行うことである。将来の課題である分析的な作業に先立ち、粗い枠組み設定による蓋然的理解を試みることにする。また、その外挿として、現在泥炭湿地林を中心に進行中の「開発」に関わる問題の提示を行いたい。

そのために、まず、泥炭湿地林の生態的特徴に注目する。ここでの生態的特徴とは、単に、森林のもつ生物学的特徴のみを意味するのではない。むしろ、人が森林と相対した時に現れる特徴であり、人が泥炭湿地林をどのように認識してきたか、人の目にどのような森林として映っていたのか、という点を重視する。「生態」を、「自然の生態」でなく、「人間の目から見た自然」としてとらえるそのような視点をあえてとってみた。

事実として、泥炭湿地林は、人がまったく手をつけなかった、少なくとも森林としての形を残さないまでに破壊されることのなかった森林である。熱帯地域に限らず、世界中のどのタイプの森林にもましてよく残っていた森林といえる。その理由を人々をひきつける「宝」のなさや人々の侵入を拒む瘴癘性に求める。

この泥炭湿地林もやがて拓かれてゆく。伐開のスピードは急激である。次に注目するのは、この森林景観が激変する歴史上の一時期である。この転換点を、泥炭湿地林の「近代」として捉え、「宝」のかわりに「資源」を見いだしてゆく過程とそれに伴う泥炭湿地林の変貌の様子を、最初にこの森林と関わったパングロン (panglong) と呼ばれる森林伐採労働者、次に潮汐灌漑という「武器」をもって森林内に入植を試みた人々、彼らの活動を中心に記述する。

最後は、泥炭湿地林の将来についてである。泥炭湿地林の「開発」をめぐる今日の問題を明らかにしつつ、歴史に反映された生態的特徴をもとに、泥炭湿地林のあるべき姿を探してみる。

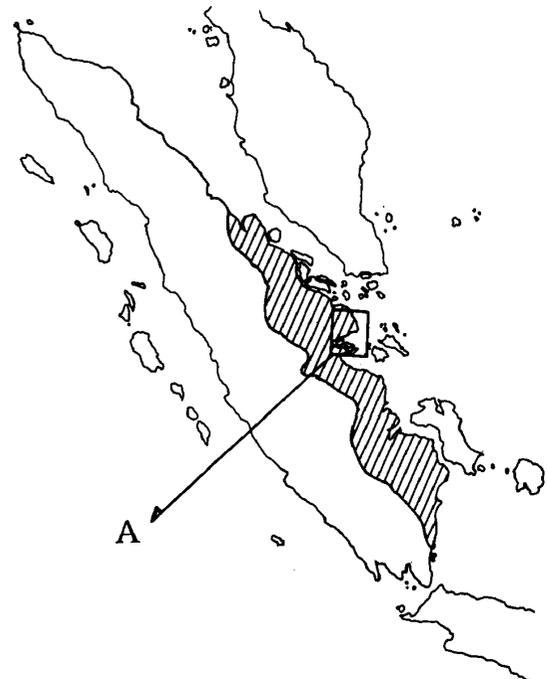


図1 調査地
Aの枠内が図3に示された範囲に相当。
斜線部は泥炭湿地帯。

II 泥炭湿地林の「生態」

泥炭湿地林は、群系 (formation) として他の熱帯林から明瞭に区分される森林である [Whitmore 1975]。しかしその相観は様々で、平均樹高、材積量、階層構造、構成樹種などは、泥炭湿地林に類別される森林の内でもきわめて変異に富んでいる。例えば Anderson はサラワク・ブルネイで、泥炭の発達に対応して6タイプの泥炭湿地林を認めたが、樹高 50 m を越えるアラン (*Shorea albida*) の純林タイプから、最大樹高が 15 m を越えることのない矮性の疎開林タイプまで、その相観は大きく異なっている [Anderson 1964]。

地理的にも泥炭湿地林は異なる相をみせる。Anderson はスマトラでも泥炭湿地林の調査をしているが、2タイプ、混交林型と疎開林型、とに分けえたのみである。また樹種構成も、サラワク・ブルネイでは寡占樹種であったアランがスマトラでは欠落するなど、かなり異なるものであった [Anderson 1976]。

リアウの泥炭湿地林については、一連の調査でやはり2タイプが認められた。相観図を示したが (図2)、それぞれの林分を、相観的に極めて特徴的であった樹種に注目してニボン型とパンダヌス型と呼んでおく。調査地域に関しては、1989年8月の TM 画像を得ているが、図3に示したような2つのタイプの面的な広がりを確認できる。²⁾

ここでは、リアウで見られる泥炭湿地林の2タイプについて、どちらも明らかに人為的な攪乱を受けていること、その結果一方の森林タイプではパンダヌスが侵入し、他の森林タイプではニボンが目立っていること、そしてこの2つの森林タイプは立地する泥炭の厚さに由来すること、³⁾ を指摘しておくにとどめる。森林生態学的検討は別の機会に行いたい。

泥炭湿地林は、その樹種の多くが他の群系、例えば低地フタバガキ林、にも重複して見られたり、また、マングローブ林やクランガス林のように相観的に他の群系と峻別できるような、際だった特徴はない。しかし、その立地する基盤は極めて特徴的である。泥炭湿地林は木質泥炭という特殊な基盤上に形成されている。この泥炭は、落葉・落枝などの植物遺体が水漬けの状態で集積したものである。無機的な泥・シルトなどが堆積した土壌とはまったく異なっている。有機物の含量は高く、一般的に泥炭の定義は灼熱損量が55%以上とされるが、泥炭地域の中央部では灼熱損量が90%を超えることもある [古川 1992]。ルーズに折り重なった太枝や幹の間隙を、落葉・小枝が半腐り状態で充填している構造になっている。重い樹体を支えるに

2) TM の画像処理については、インドネシア公共事業省衛星画像処理センターに派遣されていた内田 諭 JICA 専門家の協力を得た。

3) Yamada and Sukristijono は、南スマトラのパニュアシンで淡水湿地林の調査を行っている [Yamada and Sukristijono 1980]。その調査林分は、プライ (*Alstonia angustiloba*) が最上層木になり第2層にニボンが優占することなど、相観、樹種構成においてニボン型に類似している。泥炭湿地林のニボン型は泥炭の薄い (1 m~1.5 m) ところに出現するが、淡水湿地林との中間型、あるいは移行型と考えられる。

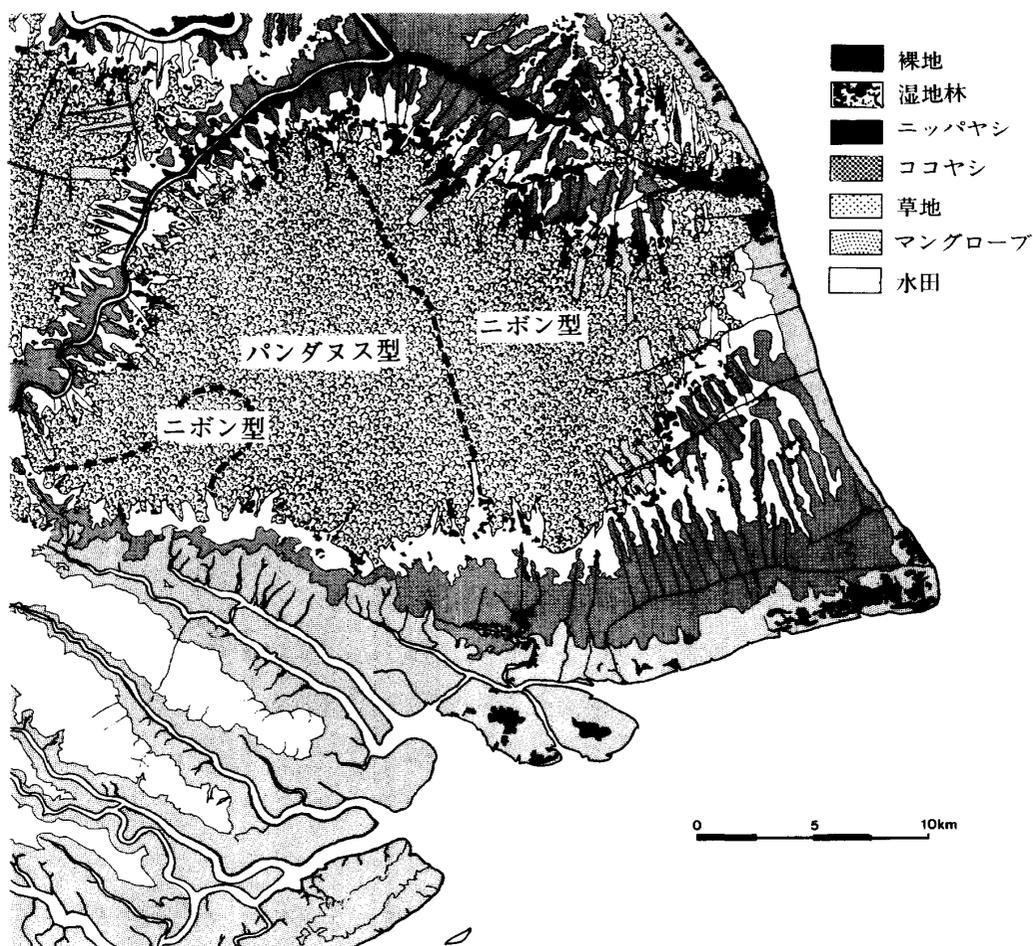


図3 1989年時の泥炭湿地林開発の様子 (TM画像より)

は基盤が弱く、大木には板根がよく発達する。地下水位は高く、林床はつねにジメジメしている。この水は雨水のみに由来し、河川水などの流入による無機質の供給がないため、貧栄養である。その象徴のように林内にはウツボカズラが多くみられる。林床ばかりでなく、樹冠にうっ閉された林内も水分過飽和な状態である。泥炭湿地林は、ひとこと言えば、泥炭という貧栄養で不安定な基盤の上に成立した超過湿な空間といえる。

森林が人に対して持つ両義性、両面価値性は、熱帯多雨林に関しては、「宝」と「瘴癘性」に要約される。すなわち、熱帯多雨林は外の人間を引きつけてやまない魅力的な森林産物の宝庫である、しかし同時に、一度足を踏み入れたなら死を覚悟しなければならない瘴癘の地でもある [高谷 1993]。泥炭湿地林について、この森林が人にとってどのような森林であったのか、瘴癘性と宝、この2点から捉えてみる。泥炭湿地林の人間から見た「生態」についてである。

まず、一年を通じて過湿な空間であることが、大きな意味をもつ。肉体的に、そしておそら

く心理的に、この湿った森林は人にとってもっとも好ましからざる空間である。健康上は、例えばマラリアなどの罹病率とかの客観的データを示しえないが、この多湿な環境が、潜在的に病原菌の猖獗する衛生的に不健全な地であることは、人類史において一般に湿地帯が最後まで人の侵入を拒む地域であったことからもうかがえる。

後述するように、スマトラの泥炭湿地林の内部に最初に居住を試みたのは、パングロンと呼ばれる、中国人伐採労働者集団である。彼らの当時の生活のありさまを伝える報告は、泥炭湿地林内の居住環境、衛生状態の劣悪さをよくあらわしている。シンガポール海峡政府は1898年に131の伐採キャンプで労働環境の視察を行っているが、あまりの病人の多さに、3年以上パングロンとして働くことを禁ずる勧告を行っている [Pastor 1927]。病人の多くは、マラリア、beri-beri、消耗性疾患である。beri-beriは、脚気あるいは脚気様の病気であり、栄養失調、特にビタミン不足による神経障害の一種で、浮腫ができる。特にこの beri-beri が多かったというが、泥炭湿地林内の野菜の確保は今でも大変である。

実際、この森林はどうてい快適とはいえない。このことは歩いて見ればわかる。林床は腐りかけた倒木が足場構造をなしその上を落葉が覆っているだけだから、うかつに歩くと太股まで足を突っ込む。よく張った板根の上を辿って歩くのがこつだが、踏み外してあわてて手をのばすと、トゲだらけのヤシの葉や伸張枝をつかむことになる。ニボンヤシも幹に鋭い刺をもつが、樹冠がすいて日が当たるところではアサンパヤという幹立ちしない刺だらけのヤシがことに多い。泥炭湿地林に入った経験のあるものは、まず皆、まちががなく不快な印象をもつ。例えば、本特集の座談会 [田中ほか 1993: 486] で山田勇氏は、熱帯多雨林はけっして不快で恐ろしいところではなく、居心地のよいところである、と主張しているが、それでも、ブルネイでの調査経験から、こと泥炭湿地林に関しては、研究対象として興味をひく形態的、生態的特徴が少ない上に、「足場の悪さが前進を躊躇させ」「病虫害についてはわけのわからぬ不安が常につきまとい」「できれば調査対象としたくないところであった」と述べている [山田 1991: 80-81]。

一方「宝」についてはどうか。スマトラで宝といえは、香木と金が双璧である。古来よりこの地に人を引きつけたのは、この2つの森林産物であるが、そのどちらも泥炭湿地林には産しない。

Wolters [1967] はスマトラと中国の交易を刺激し、ひいてはスマトラに世界の関心を集めるにいたった産品として3つの森林産物を挙げている。安息香、竜腦そして松脂 (ju), いずれも特定の木に由来する樹脂である。まず、安息香樹 (*Stylax* spp.) は、タバヌリを中心としたいわゆるバタック・ランドの標高 1,000 m を超える山地帯に広く生育する [吉田 1971]。タバヌリ地方は現在にいたるまでの安息香の主産地である。竜腦樹 (*Dryobalanops aromatica*) はそれより低い丘陵地帯の低地フタバガキ林内に点在する。しかしより低位の湿地林帯には生育し

得ない。松脂 (ju) に関しては Wolters は北スマトラの高地に生育するメルクシマツ (*Pinus merkusii*) の樹脂としているが、松と同じように球果を生じる他の熱帯針葉樹 (*Podocarpus*, *Dacrydium*, *Agathis* など) の樹脂も含めたものである可能性も指摘されている [Dunn 1975]。松脂 (ju) がメルクシマツに限定されるものであれ、他の針葉樹を含むものであれ、これら熱帯の針葉樹は泥炭湿地林を構成する樹種ではない。

ほかにスマトラの森林産物として名を知られているものにガハル (gaharu) と呼ばれる香木がある。ガハルは沈香の類のことであり、泥炭湿地林にも産し、今でも地元マーケットで扱われている。材の病変部に特有の芳香を示す樹種は数多くしかも分類学的に広い範囲で知られており、それらがひとまとめに沈香あるいはガハルと称されている。したがってその中には、芳香において雲泥の差があり、「価値に於て鉛と黄金ほども違う」ものも含まれている。泥炭湿地林のガハルは中国市場で珍重された真の沈香、すなわち海南島産の沈香やチャンパの伽羅木のような *Agallocha* 属 (ジンチョウゲ科) のものでなく、同じジンチョウゲ科でも別属の *Gonystylus bancanus* から産出されるものらしい。泥炭湿地のガハルは、低品位であり、世界市場ではほとんど価値をもたなかった。⁴⁾

金はむろん森林産物ではないが、香木などと同じく大地の恵みとして森林にわけいて探し求めるイメージが強い。香木などのいわゆる森林産物にもまして中国やアラブの商人をスマトラに引きつけたのは金である。金は砂金として集められる。熱帯の砂金鉱床は、金を含んだ石英脈などが風化し堆積した土壌、その表層に金粒の濃集した露天鉱床として存在する。クランガス土壌でしばしば砂金の採取が行われるのはこのためである。植物遺体の積み重なりである泥炭地帯には砂金はもとより存在しえない。スマトラでは金の産出地として有名なのはパダン高地やバリサン山脈中のクリンチ地方などの山地である。

以上、生物学的な視点を離れ、泥炭湿地林が人にどのような姿で映ったのかをしてみると、人の関心をひく魅力的な「宝」のまったくない、しかも、短期間ですら留まることを躊躇してしまう危険な森林の姿が浮かびあがってくる。人々の関心を呼ぶ森林でない。実際泥炭湿地林は人の姿をまったく見ない森林であった。⁵⁾

スマトラの宝を求めて訪れる商人は、泥炭湿地林などに目もくれず、ニッパヤシの縁どる河川をひたすら先を急いだ。大洋を越えてやってきた人々にとって、スマトラの泥炭湿地林はわざわざ立ち寄る価値のない所であり、陸地というよりもむしろまだ海域の延長であった。彼らが上陸するのは泥炭湿地林の背後、内陸部にある丘陵地であり、そこに港市を形成してゆく。

4) gaharu については新田あや氏にご教示いただいた。中国語資料にしばしば劣位の沈香として記載されている棧香が、これにあたると思われる。棧香を含む沈香の品種と産地、その価値等については、中国資料を渉獵した山田 [1976] に詳説されている。

5) 正確にはオラン・ラウトが泥炭湿地林の周囲にいる。ただし彼らは、文字どおり海の人で、森林の周縁、汀線に生活の場があり、森林内に住んでいたのではない。

地図上で示せば、ジャンビ、パレンバン、レンガットなどの主な港市は泥炭湿地林の低湿地と低地フタバガキ林の丘陵地の境目に連なっている。外来者にとっても在来者にとっても、バリサン山脈から丘陵地がゆるやかに起伏しながらマラッカ海峡に低向し、最終的に低湿地林と接する線こそがスマトラ東岸における海岸線であった。スマトラの諸港市は地形上は内陸の港であっても、実質的には外港であり海港であった。⁶⁾

スマトラ東岸の内陸部の海岸から離れた奥深いところに、地名にパンカラン (pangkalan) とつくところが多い。パンカランはマレー語で、上陸地点、棧橋、荷揚げ場を意味する [Wilkinson 1959]。外来者が上陸し、在来者とコンタクトをとった地点として、やはり“内なる海岸線”の存在を感じさせる地名である。⁷⁾

泥炭湿地林は大洋に擬せられる。訪ねる人もなくひたすら厚くその植物遺体を積み重ねつつあった。

III 近代の到来

泥炭湿地林にようやく人々が関心を示すようになる。泥炭湿地林に価値を「宝」を見いだす人々が現れる。1819年に建設されたシンガポールに居住し始めた人々である。

III-1 パングロン

シンガポールの建設とその後の発展は、周辺地域の森林に急激な建築用材や燃料材の需要を生んだ。まず裏手のジョホール森林が伐採され、ついで対岸のリアウ諸島、そして最後にスマトラ東海岸の泥炭湿地林・マングローブ林に手がはいる。このシンガポール市場に向けた森林の伐採を請け負った集団は、パングロンと呼ばれた。最初のパングロンは、1860年代から70

6) ジャンビ、パレンバンは歴史的過去において現実に海港であった可能性が示唆されている。オブデインは、地形学的、地理学的考察に、伝承や古記録から得た情報を加味してスマトラ南部の地形発達史を再現した結果、スマトラ東海岸の沖積地帯は部分的に海に覆われていたこと、海岸線が海にむかって急速に伸張していったことを指摘している [Obdeyn 1941]。そこに示された過去のスマトラ南部の推定海岸線によると、ジャンビもパレンバンも岬の先に位置することになる。推定海岸線の妥当性の地形学的な検討はともかく、この論文中に引用されている古記録や伝承に述べられた海岸線に関する記述は興味深い。深見諷、古川校訂のこの論文から、引用してみる。「マレー人の伝説では昔の海岸線はバタック高原の前山にまで達した」(Hoekstra の学位論文 *Die Oro-und Hydrographic Sumatra's* から)。「デリの原住民の伝承として200年足らず前(1600年代)に海はかつて30マイル内陸に達し、また Asahan 河流域では Serantan まで15マイル内陸に達した」(Anderson の *Mission to the East Coast of Sumatra* から)。「現在パレンバンは海岸から40英マイル離れているが伝説によるとこの町は、約400年前にかつてのムシ河の河口に建設された」(Van Sevebhoben) などである。

7) 大木もスマトラ中南部の交易を論じた論文中で、パンカランという地名に注目している。パンカランを名にもつ地点を内陸の輸出産物の集荷地としてとらえた上で、ミナンカバウ語にその起源を探り、水浴・洗濯等の作業のために石畳などを築いた場所が、後に(17世紀よりもかなり以前に)船着場となりさらに交易の中心となった、としている [大木 1981]。

年代にかけて形成されたと思われる。⁸⁾ スマトラの東岸ではバガン・シ・アピ・アピからインドラギリ川の河口までの泥炭湿地林やマングローブ林にパングロンが入り、20～30人の単位で伐採小屋を建て、伐採・搬出の作業を行っていた。今でもこの地域一帯に、Panglong 42 といったようにキャンプ番号をつけた地名が残る。

パングロンの経営者 (taukeh) は、造船所、製材所、家具工場などを所有するシンガポール在住の中国人である。彼自身は、伐採地に行くことはない。伐採現場で、どこでどれだけ木を伐るのか判断し、パングロンの割り振りを決定し、食糧・飲料水の調達計画を練るのは、もっぱら伐採監督 (kepala) に任される。パングロンは、伐採小屋周辺の木を伐りながら転々と森林内を移動してゆくので、経営者はどこにパングロンが位置しているのか正確にはしらない。彼の関心はどれだけ材が生産されるかだけである。材は機帆船 (tongkang) でシンガポールに運ばれる。シンガポールからは食糧・生活用品が運び込まれる。パングロンの位置を正確に知り、シンガポールと森林内のパングロンを結び付ける役割は、この機帆船の船長 (taikong) の手にかかっている。

パングロンもこの tongkang で運ばれる。パングロンは例外なく中国人である。彼らは kedeh nasi (coolie-house) に宿泊しシンガポールでの職を探しているが、職が見つかるまでの宿泊費がかさみ借金を重ねる。賭博場で借金をする者も多い。彼らがやがて借金を理由に半ば強いられるようにパングロンで働くようになる。ゴム農園で働くのだ、といわれ泥炭湿地林に連れてこられ、借金を返済するまで帰ることはできない。しかも、食糧のほとんどはシンガポールから運ばれ、kepala を通してしか手に入れることはできず、給料の中から割高な食費が差し引かれる。さらに、強制されることもあるようだが、厳しい肉体労働のあとの唯一の楽しみとしてアヘンの吸引の習慣ができる。アヘンの購入のためますます借金返済は滞る。

一つのパングロンには、伐採監督の下に、人夫頭 (mandor) が1人おり林内作業は、伐倒、木挽、樹皮剥ぎ、搬出、軌道敷設などの役割分担が決まっている。ほかに料理人、記録係がいて一つのパングロンを構成している。搬出要員、軌道敷設要員には若い者が多く、作業がきつくしかも給料は安い。

以上のパングロンの生活の記述はおもに Pastor [1927] の報告書によった。今世紀に入ってパングロンの活動は単に泥炭湿地林の木材伐採にとどまらず、多様化してゆく。例えば木炭もパングロン形式で生産され、シンガポールだけでなく香港・インドにまで輸出されるようになる。またニボンは、杭上家屋の柱に、あるいは漁業用のエリ欄に大量に必要とされ、1930年頃にはすでに枯渇気味であったが、これもパングロン方式で伐採・集荷されるようになった [Haring 1934]。中国人によるパングロンの活動は1940年代に入っても続けられた。また、インドネシア独立後もマレー人がオーナーとなり、1962年にシンガポールとの往来が制限される

8) ベンカリス地域の最初のパングロンは1876年であったという [Jelles 1929]。

ようになるまで行われていたという。

中国人のパングロン経験者にインタビューをしようと試みたことがあるが、インドラギリ河口のブカワン集落で福建出身の老人を1人捜し当てたのみである。しかも、相手があまりに高齢であったため、ほとんど情報を得ることができなかった。ただ、今もこのあたりではパングロン労働者の悲惨な生活は世代を経ても語り草になっているらしい。インタビューに立ち会った彼の家族やブカワン集落の村長（中年のマラユ人）によると、「パングロンたちは25歳を越えると体力的にもたなくなる」、「病気になっても治療を受けられず死んでいった人が多い」、「ひとたび病気にかかるると邪魔になるので林の中に捨てられた」らしい。

リアウの調査地域では1978年以降、製紙用材として主にマングローブ林の伐採が進んでいる。伐採作業は基本的にパングロン時代と今も変わってない。パングロンの生活の様子をいくらかそこから想像できる。現在の伐採作業は、トロッコ用の鉄路を敷設するグループ (langsir) と実際に伐採し搬出作業を行うグループ (kerja dalam) に分けられている。斡旋業者がスラット・パンジャンに10人ほどいるが、マラユ人はこらえ性がなくすぐ逃げだしてしまうという。働いているのはほとんどがジャワ人である。給料がいいので地縁・血縁の口込みをたよってジャワ島から直接来ている。伐採・搬出グループは5～10人ほどがベデン (beden) と呼ばれる単位となり、林内に仮小屋をかけ、移動しながら作業を行う。ニポンを割裂いた床、ニッパの葉を編んだアンベラで屋根を葺いた側壁もない粗末な小屋は、パングロン時代と同じである。kepala beden と呼ばれる長がいて、林内作業や生活諸般を取り仕切っている。各ベデンにチェーンソー・マンがいる。チェーンソーは玉切りするのに使われる。足場の悪い林内での伐倒作業には、危険防止のため、もっばらオノが使用される。夫婦でベデンで働く者もいる。妻は料理人として働く。男達が仕事に出かけたあと、森の中の小屋に1人残るのが恐くてたまらないという。

契約時に最低3カ月は働くことを約束させられるが、その期間をすぎるといつでもやめられる。何度もジャワと行き来しながらベデンの仕事を続ける者も多い。森林内の作業は以前と同じく厳しいが、労働条件はパングロン時代に比べずいぶん改善されている。

1世紀近くにわたって続けられたパングロンの活動は、泥炭湿地林の景観を一変させるものではなかった。伐採対象となったのは直径40cm以上の木だけであり [Anonymous 1928]、対象樹種も限られていた。⁹⁾ 機械力にたよらず人力のみで択伐する限り、林相は大きく変貌するものでない。当時のパングロン労働者はあまりに非力であり、林内に刹那的に居住したにすぎず、結果として林内に屍をさらすだけで、泥炭湿地林の景観をかえることはなかった。

9) Punak (*Tetramerista gabra*), Suntain (*Palaquium* sp.), Meranti (*Shorea* sp.), Balam (*Palaquim* sp.) など [Fluyt 1935]。

III-2 入植者

泥炭湿地林の風景を根本的にかえていったのは、パングロンに続きこの森林に関わるようになったマラユ人、バンジャール人、ブギス人の入植者¹⁰⁾である。彼らの手によって、泥炭湿地林は可耕地へ転換されていった。水浸しで耕作地として不適と思えた泥炭湿地林も、排水さえ十分であれば農耕地にできる。森林を焼き払い水路を掘る、パサン・スロット、潮汐灌漑と呼ばれる方法で開墾が進んでゆく。熱帯泥炭の場合、深さ1mほどの水路を何本か平行に掘るだけで有効な排水が可能だ。効率的な水路掘削のために、やや深目の水路をまず掘り、ついでその水路に直角にそそぎ込むように今度は浅めの水路を切る。まず稲作を行うが2～3年目には稲の植っている中、およそ7m間隔でココヤシの苗木を植える。稲作はココヤシが生長し樹陰を落とすようになるとやめる。ココヤシは、収穫後、乾燥小屋で、はぎ取った硬殻を燃料にいぶし乾燥した上で、直接あるいは仲買人を通じて油工場に運ばれる。

森林とのかかわりで、図2に示した2つの森林タイプでは、開墾後栽培される作物の違ってくるところを指摘しておく。むろん、泥炭の厚さを反映したものだが、ニボン型では稲作が可能で、一方パンダヌス型では稲作はできずトウモロコシが主に栽培される。ココヤシの生産量もややニボン型の森林が良いという。マラユ人は、この違いを森林のタイプの違いでなく、泥炭の「色」で認識している。ニボン型の森林の立地するのは「白い泥炭」であり、パンダヌス型の森林は「黒い泥炭」に立地する。¹¹⁾

潮汐灌漑の歴史的展開、エスニック・グループごとの技術的異同など、社会経済的背景や農学的技術面の検討については、すでに、古川が詳細かつ広範に論じている [古川 1992]。¹²⁾ここでは、図3に表れる、泥炭湿地林内の開墾地の、面的な広がりを確認してもらいたい。泥炭の薄い所から森林が蚕食される様子が図示されている。森林は切り開かれ、水路はどんどん延長される。水路の伸びてゆくさきに稲作地が次々つくられ、一方古い水路周辺には次第にココヤシ園が造成されるようになる。

10) リアウ州を拠点としていたマラユ人も泥炭湿地林に関しては「移住者」と考えたほうがよい。Schotは1880年頃、北緯0°から0°30′、東経103°20′から10°50′の範囲（図3の北側ほぼ3/4にあたる地域）を踏査している。彼の記録から、マラユ人の小さな集落が28（全戸数373戸）、船に住むオラン・ラウトが29家族、伐採活動（パングロン）あるいは小売商に従事している中国人が91人いたことがわかる。マラユ人は Suku Nam と呼ばれるグループで、リング諸島から移住してきたという。彼らマラユ人のサゴ栽培が、バンジャール人入植者達の潮汐灌漑による泥炭湿地林開拓に先行していたようだ [Schot 1884]。

11) Tanaka はリアウ州のガンサル河下流域のジャワ人及びブギス人入植者が、やはり泥炭を「色」で判別していることを報告している。この場合、有機物の分解がある程度すすんだ「黒い泥炭」とほとんどすすんでいない「赤い泥炭」にわけられる [Tanaka 1986: 121-122]。

12) 古川は湿地稲作技術と水路掘削技術が合わさった感潮帯開拓技術の系譜について、古く紀元以前の紅河の雑田につながる可能性を示唆している。本小論と関連で興味深いのは、東南アジア島嶼部においては潮汐灌漑が、バンジャール人により、1885年頃、インドラグリの河口あたりで完成したと結論している点である。

III-3 泥炭湿地林の近代

スマトラの泥炭湿地林によろやく「宝」を見いだした。しかし近代の枠組みの中で、それは「宝」と呼ぶより「資源」と呼んだ方がもはやふさわしい。「宝」から「資源」への認識の変化は、前田がブギス社会の森への対応が「(森の) 恵みを享受するというのでなく、積極的に森から奪いとる態度へと移行した」[前田 1993: 422] とのべている過程である。森林は、「宝を授かる」ところでなく、「資源を開発する」ところとなった。泥炭湿地林への近代の到来は、「資源」開発が行われた時点である。「資源」とはまずシンガポール人にとっての木材資源であり、ついでパンジャール人・ブギス人らの移住者にとっての土地資源であった。¹³⁾

先に、泥炭湿地林を「生態」的に「海」に擬したが、近代は、泥炭湿地林を「海」から「陸」に変えた。「宝」をもたず永く人々にかえり見られることのなかった泥炭湿地林も、新たな「資源」として開発の対象となった。

桜井 [1990: 209-211] は東南アジアの近代を、この地域が海域世界となり世界経済と直接結ばれる時代、すなわち農業空間が海と結ばれ、農作物の商品化を通して商業権力が直接農民を支配するようになる時代と定義した。その上で、海域世界の辺境でありながら白檀交易が古くから行われてきたチムールを例にとり、前近代から近代への道のりを、一気に景観が変わるような峻険な山脈でなく緩やかに長く続く丘でありそれと気づかない内に峠を越すようであった、と形容している。

一方スマトラの泥炭湿地林の近代への転換は、チムールに見られるような漸進的なものではなかった。

泥炭湿地林は地理的に東西交易の要所にあった。太古の昔から商人の往来は頻繁であり世界市場はすぐ側を通過していた。それでも泥炭湿地林は長らく世界市場と結びつくことはなかった。それがいまや、泥炭湿地林で生産されるココヤシは、油工場に送られ商品として世界市場に直結している。パングロンと呼ばれる人々がこの地で活動を始めて以来、近代の到来は唐突で急激であった。

商業的なネットワークが中心となる世界、すなわち、「もの」の地域間移動から利潤を得ようとする人々と彼らが移動の媒体として拠り所とする海からなる世界を海域世界とするならば、東南アジアは極めて海域的な世界である。泥炭湿地林は、その海域世界の中心に位置しながら、最後まで地球の隅々まで商品を求める人々から無縁であり続けた。泥炭湿地林とはそのような森林である。

13) 石油も泥炭湿地林地帯で新たに開発の対象となった資源である。リアウ州では1939年にブカンバルの北 65 km にある Sebangga で試掘が行われて以来、第二次大戦中に日本軍が Minas で、戦後は1950年から Caltex が引き継ぎ、石油の開発を行ってきた。その結果、泥炭湿地林を貫いてパイプラインと道路が建設され、人口400人足らずの寒村であった Dumai は近代的な施設を備えた港湾となった [Anderson *et al.* 1972: 111-112]。

IV 泥炭湿地林の将来

潮汐灌漑により森林が開かれ、ココヤシ園がつくられ、村ができた。ココヤシ園の林床にはタマシダが群生する。このシダのむせかえるような草息吹は、熱帯の光の豊かさ、あふれでるエネルギーを象徴している。アイル・ヒタム、泥炭から流れでた黒い水をたたえた水路は、両岸のココヤシの樹影を写して静かに揺れている。その水面を割って、コプラを満載したサンパンがすべってゆく。

とうてい人を寄せつけないと思えた荒々しい森林も豊かな落ち着いた緑の地にかわっていった。人間一人一人の、障碍を超える英知、たゆまない努力、不屈の精神にただ感激する。人間活動のもっとも素晴らしい面を見た気がする。

しかし、泥炭湿地林に創出された豊かな風土、そのどこかに疑問を感じることもある。

すでに、熱帯・温帯を問わず、泥炭土壌研究者らから明確に指摘されていることがある。泥炭という特殊な基質が宿痾としてもつ、沈下という問題である。泥炭は、排水により収縮と分解が起こるが、この排水に伴う急激な土地面の沈下は泥炭地の開発に際する最も深刻な問題である。泥炭地は確かに残された潜在的可耕地であるが、どこまで開発可能なのか、まだはつきりしないのである [久馬 1983]。

豊かなココヤシ園と水路の風景も、泥炭といういずれ消失する「虚構の地」[古川 1992]に成立した幻かもしれない。

泥炭地に入植してきた人々は、どうも、このことを強く意識しているようだ。誰もこの地に執着していないようなのだ。実際人々は一つの場所に留まるのを厭うように転々としている。

クアラ・スラット集落は、マラッカ海峡に注ぐプダダ川の河口にできた、マラユ、バンジャール、ブギス、そして中国人と様々な人々の寄り集まってできた集落である。杭上集落で、純粋な漁村ではないが、漁業とくにゴンバン (gembang) と呼ばれる袋網を使ったエビ漁が盛んである。半数近くの住人がここより上流に潮汐灌漑でひらいたココヤシ園を所有している。ココヤシ園での作業が忙しくないときに漁業をする人が多い。現在は戸数130軒あまりだが、バンジャール人である現村長によると1950年には彼を含めてわずか5戸だけが季節的に漁業を行うために集まっていただけらしい。

その一戸一戸を訪ね、戸主にこの集落にいたるまでの来歴を聞いて回ったことがある。リアウ州内を中心に泥炭湿地林を拓きココヤシ園を造成し、やがて手のかからなくなったココヤシ園を売り払い別の地に移り、結果として3年~10年サイクルでこうした移動を繰り返している、そのような人が多かった。移動先に親戚縁者がいて、誘われるのである。移った先では、大工をしたり、漁業をしたり、あるいは再び泥炭湿地林を切り開いたり、以前の仕事にあまりとらわれることなく、そのたずきのたてかたは様々である。すでにクアラ・スラット集落に

見切りをつけ、別の地に移る計画を話してくれた人もいる。

彼らの話を聞いていると、海に棧橋のように伸びたクアラ・スラット集落の海側のとっさきにかたまって住んでいるオラン・ラウト、定住することなくついこの間までサンパン上で主に漁労を生業としながら漂泊生活をしてきた人々、彼らのほうが、かえってこの泥炭湿地林とマングローブ林の地にこだわっているように思える。昔から変わることなく森と海の接点に住んできたオラン・ラウトにとって、森林の消滅はすぐさま生活の場の消失となる。

一方入植者たちは、どこかこの泥炭湿地林を仮の宿とみている。潮汐灌漑で生産されるココヤシは、販売が目的である。ジャワのプカランガンとはいわないまでも、菜園をつくり自給用の果樹や野菜をずっと得ようとする試みはほとんどなされない。¹⁴⁾ とにかく金になるものを優先的に栽培する。米もここではまずは販売が目的とあってよい。人々は土地に愛着を持たず、金さえできればこの地から解放される、そのようにすら思っているのではないか。

泥炭の沈下・消失の問題は将来技術的に解決できるのかもしれない。しかし、農地として伐開されたばかりの泥炭湿地林は無惨である。伐採後焼払うが、大きな幹はほとんど燃えずそのまま残る。最初の稲苗は、折り重なる幹を避けて植えられることになる。森林はもはや、貴重な資源でなく、農地化にあたっては障害にすらなっている。森林の価値を求めて森林が切られるのではなく、価値を認めないがためにひらかれてゆく。

森林は野蛮な暗黒の世界である、そして、その闇をきりひらいて光をあてるのが文明である。そうだとすれば、森林を拓いてゆく人間の営みは否定できるものでないのだろう。それでも現在の泥炭湿地林の開発の状況は、あまりに刹那的のように見受けられる。泥炭湿地林は、そこに住む人々と充分なかかわりの時間を経ないうちに近代的な開発の対象となった。逆にいえば、泥炭湿地林は、あまりに急激に「近代」に直面したため開発の倫理がごまかしようなく問われる場となったといえる。

謝 辞

試論の組み立てにあたっては、古川久雄氏から多くの示唆を得ている。また、田中耕司氏からは草稿の段階で貴重なコメントを得た。記して謝意を表したい。

参 考 文 献

- Anderson, G. B. *et al.* 1972. *Pertamina, Indonesian National Oil*. Amerasian LTD.
 Anderson, J. A. R. 1964. The Structure and Development of the Peat Swamp Forest in Sarawak. *J. Trop. Geogr.* 18: 7-16.
 ————. 1976. Observations on the Ecology of Five Peat Swamps in Sumatra and Kalimantan. In *Proc. ATA 106 Midterm Seminar, Peat and Podzolic Soils and Their Potential for Agriculture in Indonesia*, pp.

14) 入植者のなかで、ジャワから来た人は例外のようで集約的な土地利用を試み、最終的に故地と同じような世界を創り出すことを理想としているという [Tanaka 1986: 129]。

- 45-55. Bogor: Soil Research Institute.
- Anonymous. 1928. Extract. Rapport Dienstreis van den fg. Adviseur voor het Boschwezen in de Buitengewesten in de Dienstkring Riouw. Unpublished.*
- アリス・ポニマン; 高谷好一. 1986. 「熱帯多雨林沿岸部の生活——東スマトラ, リアウ州の事例——」『東南アジア研究』24(3): 263-288.
- Dunn, F. L. 1975. *Rain-Forest Collectors and Traders: A Study of Resource Utilization in Modern and Ancient Malaya*. Kuala Lumpur: MBRIS.
- Fluyt, P. C. M. 1935. De Beteekenis van het Panglongbedrijf in de Residentie Riouw en de Afdeeling Bengkalis. *Econ. Weekbl. Ned.-Indie* 4(part 2): 1401-1404.
- 古川久雄. 1992. 『インドネシアの低湿地』 東京: 勁草書房.
- Haring, C. 1934. Niboengrapport. Unpublished.*
- Jelles, J. G. G. 1929. De Boschexploitatie in het Panglonggebied. *Tectona* 22: 482-509.
- 久馬一剛. 1983. 「東南アジア低湿地の土壌——その2. 低湿地下の有機質土壌——」『東南アジア研究』20(4): 492-511.
- 前田成文. 1993. 「ブギスの森と海」『東南アジア研究』30(4): 420-426.
- Obdeyn, V. 1941. Zuid-Sumatra Volgens de Oudste Berichten. I. De Geomorfologische Gesteldheid van Zuid Sumatra in Verband met de Opvatting der Ouden. *Tijdschr. Kon. Ned. Aardr. Gen.* 58: 190-216. (オブテイン, V. 1980. 『熱帯低地自然誌資料』深見純生(訳), 古川久雄(校訂). 京都大学東南アジア研究センター)
- 大木 昌. 1981. 「19世紀スマトラ中・南部における河川交易: 東南アジアの貿易構造に関する一視角」『東南アジア研究』18(4): 612-642.
- Pastor, G. 1927. *De Panglongs*. Weltevreden.
- 桜井由躬雄. 1990. 「近代と前近代を分けるもの——ヘルメス神の栄光」『講座東南アジア学』矢野 暢(編著) 第1巻, 208-243ページ所収. 東京: 弘文堂
- Schot, J. G. 1884. Het Stroomgebied der Kateman: Bijdrage tot de Kennis van Oost-Sumatra. *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde*. 29: 551-581.
- 高谷好一. 1993. 「東南アジアの森と野と海」『東南アジア研究』30(4): 386-400.
- Tanaka, Koji. 1986. Bugis and Javanese Peasants in the Coastal Lowland of the Province of Riau, Sumatra: Differences in Agricultural Adaptation. In *Transformation of the Agricultural Landscape in Tropical Archipelagos*, edited by Tsuyoshi Kato *et al.*, pp. 102-131. CSEAS, Kyoto Univ.
- 田中耕司ほか. 1993. 「東南アジア海域世界の森と海」『東南アジア研究』30(4): 478-502.
- 山田 勇. 1991. 『東南アジアの熱帯多雨林世界』東京: 創文社.
- Yamada, I.; and Sukristijono S. 1980. Ecological Study of Mangrove and Swamp Forests in Sumatra. In *South Sumatra—Man and Agriculture*, edited by Yoshihiro Tsubouchi *et al.* CSEAS. Kyoto Univ.
- 山田憲太郎. 1976. 『東亜香料史研究』東京: 中央公論美術出版.
- 吉田集而. 1971. 「北スマトラ Tapanuli 地方における安息香の栽培とその市場品」『東南アジア研究』9(3): 420-446.
- Whitmore, T. C. 1975. *Tropical Rainforests of the Far East*. Clarendon, Oxford.
- Wilkinson, R. J. 1959. *A Malay-English Dictionary* (Romanised). London: Macmillan & Co LTD.
- Wolters, O. W. 1967. *Early Indonesian Commerce*. New York: Cornell Univ. Press.

* 印の文献については下記の資料による。

Indonesian Forestry Abstract: Dutch Literature until about 1960. Wageningen: Centre for Agricultural Publishing and Documentation, 1982.